

【ポスターセッション】

児童養護施設職員のケアのスキル習得とソーシャルワーク

ーインタビューによるテキスト分析を通じてー

○ 龍谷大学 氏名 土田美世子 (会員番号 001884)

キーワード3つ：ケアの専門性 ソーシャルワーク 児童養護施設

1. 研究目的

本研究は、児童養護施設でのケアのスキル(専門性)について考察する。生活型施設において社会福祉の価値に基づき実践されるケア(もしくはケアワーク)は、ソーシャルワーク支援と連続することで、総体として施設利用者の権利を擁護し、自己実現を支援する。ケアの受け手である子どもとの関係において、ワーカーは時として強いストレスにさらされる。しかし、日常生活支援として提供されるケアは、家族による愛情に基づく無償の私的なケアの代替えと見なされ、そのスキルについて世間的に正当に評価されていない。

一方、専門職であるワーカーが実施するケアのスキルの内容は、明確に発信されているとはいえない。生活上の場面に応じて提供されるケアが、子どもの権利擁護に向けてソーシャルワークと連続して実施されているか、単なる欲求充足に向けて提供されているかは、一見しただけでは判別がつきにくい。そこで、本研究では、児童養護施設に勤務するワーカーが実施するケアのスキルについて、インタビュー調査により抽出することを試みた。

2. 研究の視点および方法

児童養護施設に勤務する、3年目の若手ワーカー2名、5年目の中堅ワーカー1名、15年以上の経験を持つベテランワーカー3名、及び施設長2名、計8名に対し、「児童養護施設で実施されるケア」について半構造的インタビュー調査を実施した。若手・中堅の職員に対しては、新人の頃に困難と感じたケアの内容、新人時代と比較して習熟したケアの内容について質問し、どのようなスキルを獲得したかを抽出した。また、ベテラン職員、施設長に対しては、上記と併せて、自分を専門職だと感じるどころ、新人の指導の留意点、家庭でのケアと施設でのケアの違いについてもたずねた。インタビューの実施期間は、2015年10月～2016年2月。1人につき、60分～120分のインタビューを行った。

インタビューは、逐語録に起こし、IBM SPSS Text Analytics for Survey を用いテキスト分析により抽出された単語を手がかりに、ケアのスキル、及びソーシャルワーク支援との関連について考察した。

3. 倫理的配慮

本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守して実施した。インタビューの実施に当たっては、個人が特定される情報については公開しないことを文書と口頭で説明し、了承を得た。

4. 研究結果

ワーカーが新人時に困難と感じたケアは、①施設での生活情報の不足によるもの ②子

どもとの関係性の未成熟によるもの ③子どもの状況に振り回されてしまう等、ケア経験の不足によるもの ④ワーカーとしてのアイデンティティの不足によるもの、に分類された。①については、施設で過ごす時間の経過に従い概ね解消されたことが語られたが、②、③、④、については、ワーカー自身の施設での日々の経験や OJT、ケースの振り返り、支援計画の作成等を通じて考察を重ねることで、解消に向けて努力が続けられていた。

新人ワーカーと中堅ワーカーを比較すると、中堅ワーカーの方が新人時の困難を多く提出した。これは、現在出来ていることが新人時はできていなかった、という対比において当時の困難が明確化されたことによる。過去との対比により現在習得したことが確認されたケアのスキルは以下の通りである。①施設の生活の時間的・空間的な見通しに立つこと(新人の頃は、先の見通しなく関わっていた) ②子どもの過去・未来を踏まえた現在の関わり(その場での支援しかできていなかった) ③子ども集団の中で子どもへの戦略的な関わり(いつ、どこで声をかけることが重要) ④子どもの自己実現に向けた関係機関との連携、保護者との関係形成 ⑤地域住民との関係形成 ⑥自己覚知に基づく自己を使用した関わり ⑦子どもの視点に立った支援(新人の頃は、頑張っていると自己満足の関わりでしかなかった)。以上のケアのレパートリー(スキル)は、過去から未来への時間軸の中のトータルな子どもの側に立ち、ミクロ、メゾ、マクロへとエコロジカルな視点のもとにケアが拡大されていることが確認できる。これは、まさにソーシャルワークの視点と重なる。

ベテランワーカーからは、必要なケアのスキルとして「子どもの話を最後まで聞き、気持ちを受け止める」「子どもたちから逃げない」ことが提出された。また、新人が「全体を理解しておらず」「見通しが立たない」ために、子どもたちの感情に「巻き込まれ」「揺らいでしまう」未熟さをもつこと、そのため、「自己を認知し」「子どもの個別の目標を日々のケアに落とし込んだ」「揺らがない」ケアが可能になるよう指導する方針が語られた。また、施設でのケア目標として「安定した生活の中で、子どもが未来に向けての力をつけていくこと」、「個々のケアが完璧でなくとも、ワーカー集団として必要なケアを提供すること」が共通して語られた。

5. 考察

子どもの長期的目標を視野に入れたケアが日々実践される時、ケアはソーシャルワークと連続することができる。ソーシャルワークのスキルには、知識的スキルと属人的技術があるとされるが、施設におけるケアにもこの両側面があると考えられる。ケアの質を左右する、子ども理解、子どもとの関係性の深まりは、子どもの成長発達、コミュニケーション技術等に関する知識の増加だけでなく、子どもの置かれた環境に対する共感的理解、その前提となるワーカー自身の育ってきた家庭と自己の価値観との関係への理解を含む自己覚知を通してなされる、属人的技術の深化を必要とする。ケアのスキルを習熟するためには、子どもから学び自らも成長するという双方向の視点に立ち、ケア実践の振り返りを積み上げていくことが必要であると考えられる。